

史遊会通信

No.230号
平成26年
4月10日

編集
042-754-9360
arai-hiroshi@
jcom.home.ne.jp
新井宏

三月講演要旨

天智天皇の謎解き

隆 恵

今回は日本人なら誰もが知っている飛鳥時代の天智天皇の謎を解くこととした。

七二〇年に完成したわが国初の歴史書の日本書紀では、蘇我氏を中心とした大豪族による権力構造を、時の権力者の蘇我蝦夷と入鹿親子を抹殺して、天皇を最高権力者とする奈良時代以降の律令制度の先駆けとなる政治の大改革(大化の改新)をした偉大なる君主となっている。

しかし近年の研究で、書紀が述べるような政治制度の改新は、三十年以上のちの政治改革を繰り上げて創作記録したと言うのが定説

となっている。

古事記と日本書紀は、我が国の建国の過程を把握する最古の文献であるが、元来奈良時代の初期の天皇とそれを支える藤原氏の思惑が入った歴史書であり、その記録には真実と虚飾が混在している。記紀の記録の虚飾をはぎ取る事によって、歴史の真実が判明する。

さて、天智天皇(中大兄皇子)の謎の幾つかを列挙してみると、①最高権力者として三十年君臨するも、天皇在位はたった三年間のみで、大半は皇太子として母親と叔父の天皇を補佐したとあるが、なぜ天皇即位が遅れたの

例会のお知らせ

◎ 四月例会

日時 平成二十六年四月二十三日(水)
午後六時十分～八時

会場 千代田区立日比谷図書文化館

四階セミナールーム

講演 鍋屋次郎氏

テーマ 高山右近マニラでの殉教に至るまで

五月号自由執筆 柴田弘武、瀧澤中、

鍋屋次郎の諸氏 締切四月末

◎ 五月例会

日時 平成二十六年五月二十八日(水)
午後六時十分～八時

会場 千代田区立日比谷図書文化館

四階セミナールーム

講演 高橋正彦氏

テーマ 年輪・放射性年代法に関する

科学データの信憑性

六月号自由執筆 高橋正彦、太田精一、

森下征二の諸氏 締切五月末

か。②母親の斉明天皇亡き後七年間も天皇不在の皇太子として政治を差配したと言う俗称天智称制の実態はどうだったのか。③六六〇年に唐と新羅により滅ぼされた百済の再興のために、二万七千人もの大軍を半島に派遣し

結局大敗北する訳だが、終生百済支援に拘った理由は何か。④六六三年の白村江の戦いで唐軍に敗北した後、西日本に沢山の砦を造り、本土決戦の準備をしたと記録されており、尚且つ戦勝国の唐の使節と軍隊が天智の崩御直前まで長期滞留したとあるが、この唐の使節と軍隊の来訪の真相は。⑤六四五年の乙巳の変(蘇我蝦夷と入鹿の抹殺)の立役者となっているが、本当なのか。⑥実弟の大海人皇子(次期天皇の天武天皇)を配下として指揮命令していたとの記録だが、本当だったのか、などなど数多くの疑問がある。

本日は、これらの数多くの謎の中から「天智称制と度重なる唐の使節と軍隊の長期駐留」の真相を説明しようと思う。

本論に入る前に、書紀の解説に際して、絶対的な前提条件をきっちり把握しておかないと、書紀に幻惑されて真相の解明ができないので、その条件を最初に述べる。

書記の編纂者は、天武天皇の皇后で天武亡

きあと即位する持統天皇の血統の天皇たちの血統の正当性を天智天皇に求めているので、天智の神聖視が編纂上の根底にあることを肝に銘じておく必要がある。

次に、飛鳥時代以前から政治権力の指導者を天皇や皇太子と記録してあるが、これは奈良時代以降の中央集権制の時代の事であり、飛鳥時代以前は大豪族たちによる集団指導体制であった。即ち、大豪族たちが領地と領民を抱えていた時代であり、その一方天皇や皇族たちの取り柄は血統のカリスマ性のみで、天皇家は政治や軍事を差配できる莫大な領地や領民を持っていなかった。

既述した数々の謎解きに関する私の歴史観を結論だけを述べておきたい。

①天智の父親の舒明天皇は、百済の王族であった。②舒明と母親の皇極は、天皇に即位していなかった。③蘇我蝦夷と入鹿は、大王を名乗ったかは不明だが、最高権力者であった。④乙巳の変の主犯は、天智と中臣鎌足ではなく、蝦夷・入鹿の権力の奪取と親百済政策一辺倒から親新羅政策への変更を狙った阿倍倉梯と蘇我倉山田石川麻呂であった。孝徳天皇はその傀儡に過ぎなかった。⑤六六三年の白村江の敗戦の一〇二二年後に、天智は権力

者の地位を追われ、大海人皇子が天皇に即位した。⑥これを潔よしとしない天智は、六六七年に近江に脱出して近江朝を開き天皇を名乗るが、天武は六七二年の壬申の乱で、天智の遺児の大友皇子を殺戮して二朝鼎立を収束させる。⑦六六四年から六七一年までの六回の唐の使節と軍隊の来訪は、表敬訪問の親善使節ではなく、敗戦国の倭国への詰問使であり、後半のそれは唐の敵国となった新羅討伐の加勢の督促軍使であった。

「天智称制の真相」

天智称制とは、六六一年に母親の斉明崩御後、皇太子の中大兄皇子が即位せずに天皇位は空席とし、六六八年に近江で即位するまでの約七年間は皇太子の立場で政治を取り仕切った事を指す。

(一)この期間の記録の概要

●六六〇年に滅亡した百済の再興のための軍事支援を行い、六六三年には二万七千人もの大軍を半島に派遣するも、唐の海軍に殲滅される。

●この大敗北後の翌年には、唐の百済征討軍の使者として郭務儂が来訪する。

●西日本の各地に防御用の砦を建築、筑紫に

は防人を配置するなど国防対策を取る。

●六六五年には再度唐の使節が来訪、二百五十人余の軍隊を引き連れて来る。

●六六七年に近江に遷都し、六六八年に中大兄皇子が即位して天智天皇が誕生する。

●高句麗は六六八年に滅亡するが、新羅との使節の交換が語られる中、六六九年には百済征討軍から郭務儂が二千名余の軍隊を引き連れて来訪する。

●六七一年九月に天智は重篤になり、枕元に大海人皇子を呼び「後事を託す」と誘い水を出し、皇子が承服すると言えば首を刎ねる段取りをしていたが、皇子は「皇太后と大友皇子に、自分は吉野で仏道を」と言つて、天智の策略から難を逃れる。

●同年十一月に郭務儂が二千名余の軍隊を引き連れて再訪するが、一か月後に天智が崩御、この訃報を聞いた唐軍は翌年五月に帰国する。

●その一か月後に壬申の乱が勃発、天武天皇が誕生する。

●旧百済の王族や高官たちに官位や土地を与える記録が何回かある。

●旧百済や旧高句麗や新羅の使節が来訪。

(二) 天智称制の実態

書紀は、本来天智礼賛の記録の網羅とした

かった筈だが、天智を非難あるいは酷評する記録が二か所ある。一つは、天智は百済の滅亡の直前に百済支援の前線基地の筑紫に老齢の母親の斉明を迎えて、朝倉の地に山から木材を切り出して宮殿を造るが、完成まもなく焼失し、この造営に携わった者に死人や病人が続出した。これ対して人々は聖なる山から木を切り出した神罰だと言ったとある。いま一つは、即位の前年に近江に遷都するが、その都の建設に中止を求める声が多かったとある。

○要するに、長年の半島への軍事作戦、相次ぐ都の造営、また防衛砦や城の建設等々の金と労役の浪費に豪族と民からは非難轟々だったに違いない。斉明天皇は大型公共投資の好きな天皇だったと学者も言っているが、斉明と天智は一心同体であり、実権者の天智の政治は放漫政治であった。百済支援作戦は莫大な軍事費と多くの兵員を失つたにも拘らず敗戦となり、その挙句が国防のために更なる負担を豪族と民に負わせ、倭国と豪族と民にとつては「疫病神」と言つても過言でないほど相次ぐ災禍を持ち込んでくれた人物であった。古今東西の戦争の敗戦の場合は、敗戦時は戦費の回収ができないため財政の破綻と権力者

が失脚するのが常であり、書紀のような最後は天皇に即位できたなどのハッピーエンドは到底ありえない。

○これらの一連の負担は、僅かな国庫や文無し of 天皇家の歳費からの捻出ではなく、豪族たちの負担であった。民の労役も領主の豪族が財政難であったので無償の労役だったに違いない。

○以上の状況から、六六三年の白村江の戦役後遠からずして、疫病神の中大兄皇子は最高権力者の地位を追われたのではないか。

次期天皇を決定できる大豪族たちは、大海人皇子を担ぎ出したに違いない。

天智が近江に居所を移したのは、飛鳥の天武朝をよしとせず近江で旗を上げたのである。要するに、天武朝と天智朝の二朝鼎立の時代が約三年間あり、天智崩御により天武がこの王朝を打倒して完全な天武王朝が確立したと推測する。

(三) 唐の使節と軍隊の長期駐留の真相

この時期の唐の使節は、全て百済征討軍の総司令部からの使節であり、長安からの使節ではない。即ち、遣隋使や後の遣唐使のような平和時の友好的な親善使節ではないと断言してよい。

また、「倭国の捕虜の送還」の使節と言う説もあるが、当時の捕虜は相手国の戦利品として奴隷にされるのが常識であった。

○この時期の唐と半島の関係を簡単に触れておきたい。

唐と新羅の軍事同盟は、六五〇年に成立して、六六〇年に百済を攻略、六六八年に高句麗を攻略する。新羅は表向き唐と連帯して百済と高句麗を攻めるが、二か国が滅亡すると新羅は、唐が旧百済領と旧高句麗領を併合する動きに出るので、旧両国の遺民による反唐活動を陰で支援し、巧妙な二股の軍事作戦を行う。

終には高句麗滅亡後の六七〇年、本格的な新唐戦争が勃発、結局唐は長安の宮廷内の権力闘争から半島への介入を断念し、六七五年に唐を宗主国と認めさせることで休戦となる。こうした国際情勢を勘案すると、倭国の百済滅亡後の半島への軍事作戦は、百済の遺民の反唐闘争の支援と、同じく背後で支援を行う新羅とも連携した戦略だった可能性もある。唐の使節来訪を、白村江の戦い直後の二回と、数年経過後の軍隊帯同の二回とで、この使節のミッションが違うのではないかと思う。

○前半の二回の使節来訪

六六四年と六六五年という高句麗滅亡前の

時期であるので、百済の遺民たちの反抗に手を焼いた唐が、倭国に支援断念を高圧的に迫った可能性が高い。二回目は少数ながら軍隊を帯同するが、倭国の支援を完全に断念させたかったからではないか。

倭国は滅亡後の百済王に任じた王子が高句麗に逃亡したため、次なる王を任じて難波に住ませたとあるように、倭国は敗戦後も百済支援に拘った。なお、これ以外に二回の来訪記録があるが、詳細な記録がないので割愛する。

○後半の二回の軍隊帯同の来訪

六六九年と六七一年の二回とも天智時代の来訪である。

いずれも二千名余の軍隊帯同とあり、この来訪は一回だけだったのを書紀が間違えて重複記録したとの見解がある。しかし、この見解は明らかに間違いと断定したい。

確かに書紀には重複と判断すべき記録が随所に散見されるが、本件はそもそも国辱的な出来事であり、それも神聖化したい天智紀に重複記録するほど間抜けな編纂者ではないと思うからである。

本来であれば、この事実は全て無視したかったはず、しかし周知の事実であったので記録せざるを得なかったのであろう。

むしろ、二千名余の軍隊との記録こそ、矮小化している可能性が極めて高い。

この二回の軍隊の帯同は、高句麗滅亡後の唐と新羅が本格的戦闘に入る直前と直後の来訪である。

想像するに、二つの理由が考えられる。一つは、唐に抵抗する新羅を共に攻撃しようと軍使同盟を求めに来たか。いま一つは、新羅への軍事支援の停止を求めに来たか。

残念ながら、書紀は勿論唐や新羅の歴史書にも記録がないので、謎解きはできない。

天智の崩御を確認してから帰国したとの記録の解釈については、「反唐の天智の退位を迫り、親唐の大海人皇子の即位を望んだ」との説があるが、これは深読み過ぎるのではないか。使節を派遣した百済征討軍が、新羅との戦闘の激化で戦線の後退や撤退等の差し迫った事情があったからではないか。

結局天智の外征の失敗は、蘇我氏や阿倍氏等の大豪族が見返りのない戦費の負担により没落し、その後は天武親政の中央集権制が確立して行き、奈良時代以降の律令制に継承される。一方唐は宮廷革命が起きて則天武后が唐を排して周を建国し、宮廷内の混乱が続くため周辺諸国への拡張の活力を失う。また半島は新羅が初めて統一王朝を成立させる。

自由原稿

シルクロード見聞録①

慕史堂 中込勝則

いつの頃からかシルクロードにあこがれて今まで二度、中国新疆ウイグル自治区を旅行した。いわゆるシルクロードと言い習わされている所である。

第一回目は、平成十四年六月に西安から出発して蘭州・ウルムチ・トルファン・敦煌へ、第二回目は平成二十五年六月、西安・ウルムチからクチャ・タクラマカン砂漠横断・ホータン・ヤルカンド・カシュガル・ウルムチ・トルファン・敦煌・西安への旅だった。

これで、概ね、いわゆるシルクロードといわれる所の点と線は辿ったことになる。通信への寄稿文は今後しばらくの間は二回の旅行で見たままを記してみようと思う。

カシュガルは、新疆ウイグル自治区の一番西の自治区の中心都市である。タクラマカン砂漠の北の縁をたどってきた天山北道と南の縁を回ってきた天山南道とがこのオアシス都市で一緒になり昔も今も中央アジアやイン

ド・パキスタンに通ずる交通の要衝として栄えてきた。人口約四十五万人。人口の九十%をウイグル人が占め、完全にイスラムの街である。ここから西に向かう道は、パミール高原の山あいを縫って、はるかパキスタンや中央アジアとの国境に向かい、人煙を見ることが難しくなる。見聞録の手始めには、この辺境のカシュガルがふさわしい。

1、アパク・ホージャ・マザール(香妃の墓)

「香妃の墓」はカシュガル市の中心部から東北方にやや外れたところにあり、入り口の門は小さいがタイルで装飾された美しい門だ。マザールというのは、「墓」の意味である。

入り口の門からまっすぐはいって行くと、右手にもう一つ小さな門があつて、ここを入ると、小学校の体育館ほどもある壮麗な大きな建物があり、これがアパク・ホージャ・マザール(一名香妃の墓)である。

十六世紀末の新疆イスラム教白帽派の指導者アパク・ホージャとその家族五代七十二人の墓所だ。建物内には、それらの柩が整然と並んでいる。

清の乾隆皇帝の妃であつた香妃もここに葬

られたと誤伝されたために、「香妃の墓」とも呼ばれる。創建されたのは千六百七十年で、アパク・ホージャの父ホージャ・ユースフを埋葬したことがはじまりで、その後たびたび修復・拡張され、とくに千八百七十四年の大修復によつて中央アジア式イスラム陵墓となり、モスクなどが新たに建てられた。四方にはモザイクタイルの尖塔が立っている。

「香妃」といわれる女性についてみると、当時この地を治めていた回族のブルハン・ウッディーンとその弟のホージャ・ジハーンらが反乱を起こしたため、清朝第六代皇帝乾隆帝(在位一七三五〜九五)は、一七五八〜六〇年にこの地方を攻めた。ウッディーンとホージャ・ジハーンはパミールを越えて逃れたが、追跡されて捕えられ、その地で殺された。戦いのあと、ホージャ・ジハーンの妃香妃は捕えられて北京に連れて行かれた。乾隆帝が香妃が美貌であることを知っていて、ぜひとも生かして連れてくるように厳命していたからである。

香妃は、またその名の由来となった通り、体からいい香りがしたという。乾隆帝は、千七百六十年、彼女を後宮に入れ「容妃」の名

を賜った。しかし彼女は夫であったホージャ・ジ・ハーンに操をたててなんとしても乾隆帝に身を任せることを肯んぜず、中に入った乾隆帝の母后も困ってついには彼女を殺すか追放するしかないと乾隆帝に言った。乾隆帝はそれにしのびず、宮廷内にとどめておいたが、乾隆帝が外出した隙に母后は彼女を殺した。一説によれば彼女は千七百八十八年まで生き、病のために北京で歿したともいう。

享年五十五歳。

彼女の死後、遺骸はカシユガルまで運ばれ、このアパク・ホージャの墓に葬られたという伝説があり、これによつて、「香妃の墓」と呼ばれるようになったというのだが、これは誤りだ。では、香妃は本当はどうなつたかという、実際は清朝歴代が眠る墓地（東陵）に葬られた。

乾隆皇帝は彼女をあわれんで、彼女が生前身に着けていた衣装や身の回り品などを輿に乗せはるばるこのカシユガルまで送り届けた。

廟の中にはアパク・ホージャの柩を中心に歴代の柩がならんで安置されていて、その一番端に香妃の柩もあるが、柩の中におさめられているのは運ばれてきた衣装や身の回り品

などだという。

それらを運んできた輿も廟内の隅に飾られている。この廟はかなり大きい建物だが、おりしも外壁の修理工事中で外壁の一部に足場や網がかけられていて、建物全容を遮蔽物なしに見ることはできず残念だった。それでも見えるところの外壁は青を基調としたタイルで装飾されて美しい。

伝説によれば、彼女の体からはいい香りがし、それが「香妃」の名の由来となつたというが、これは食用のバラの花を食べていたからではないかと私は思っている。現在、トルコなどの国では、食用バラの栽培がおこなわれていて、これを食べつづけると薔薇の花の香りが体にしみこんで、半年も食べ続ければ次第に体からいい香りを発散するようになるという。食用バラの栽培農家が花を摘んで乾燥させたり、油を搾ったりして西ヨーロッパなどに輸出する風景をテレビで見たことがある。

彼女もある種の食用バラを用いていたのではないかと思う根拠である。そのためかどうかは知らないが、いま、廟の前にはかなり広い西洋式な庭園があつて、いろいろなバラが

たくさんの花をつけていて、これも美しかった。

○ 前庭にあまたバラ咲く香妃廟

悲劇の伝説いまに伝えて

中の門を出て右手奥のほうに進んでいくとかなり大きなモスクがあつて、たくさんの人が礼拝する場所だ。一面にじゅうたんが敷き詰められている。

入り口に、いっぱい袋状の物がぶら下がっている。これは畑に出ている農民たちが直接礼拝に来た時に、汚れた靴の上からかぶせて絨毯に上がるためのものだという。誰でもいつでも、お祈りに参加できるようにとの配慮から備えつけられているのだ。

要は、イスラム教徒にとつて一日五回お祈りすることはそれほど重要なものであるということなのである。ガイドの説明では、自分の時間配分が比較的自由にできる農民などはともかくとして、サラリーマンも増えている現在は、彼等の礼拝は朝と夕方の二回になつているとも聞く。（つづく）

自由原稿

「生き残れた」のか

「死に損った」のか

千坂 精一

毎年靖國神社に詣でるのは春の彼岸のころなので境内の桜の蕾が綻びはじめているのだが、今年はいつまでも寒波が居座っているせいで固く閉じたままであった。

特攻出撃の前夜陣になって肩を組み、

「花の都の靖國神社

春の梢に咲いて会おう」

と唄って別れた先輩たちだが、このぶんではまだ枝にきてはいないだろうが、それでももしやと思っただけのもののように境内一周をはじめたら遊就館の前に〈大東亜戦争七十年展〉の幟が立っていた。

太平洋戦争で完膚無きまでにうちのめされ、無条件降伏してから七十年の歳月が経ったということだ。

緒戦のハワイとマレー沖海戦では華々しい勝利を挙げたものの半年後のミッドウェー海戦で主力空母を喪う大損害を蒙つてからは敗戦つづきで、ついに空母は全滅してしまった。

戦闘の主力は航空機であるのに移動基地を

喪ってしまい、沖縄、台湾、南九州の陸上基地に配置せざるを得なくなった。

わたしが練習生教程を終えて実施部隊に配属されたのはフィリピン戦のあとであった。

そのフィリピン戦ではじめて航空隊による特別攻撃（特攻）が実施された。爆弾を抱いた飛行機が標的に体当たりする戦法である。

すでに多くの飛行機と熟練搭乗員を喪ってしまっていて貴重な飛行機を伎倆未熟な搭乗員に預けて最大の効果を挙げさせるには人命を無視したこれしかなかったであろう。

その特攻戦法が現実のものとなったのは、終戦半年まえの昭和二十年二月であった。

南九州各基地の残存航空隊をあつめて空母はないが名目の航空艦隊が新編成された。

司令部をおいた鹿屋基地に着任した新司令長官は麾下各航空隊に全機特攻を命じた。

それは長官自身が熟慮したことではなく、海軍省で辞令を受けたとき中央統帥機関の軍令部から命ぜられたのであろう。

戦闘員だから死は覚悟しているが、それがいつかはわからないからまだ余裕があった。

出撃しても死ぬとは限らないから鼻歌まじりなのだが、それが特攻となると発進したらふたたび此の世には還れないのだ。

極限状態におかれた隊員たちの心境は察するにあまりある。

それも出撃命令が出て全機一斉に飛び立つわけではなく、搭乗員宿舍の入口に搭乗割が掲示されて一次の出撃は明朝だが二次以降は待機である。死を宣告されてから命が終わるまでの時間がありすぎた。

まして明朝出撃が決まり、無理矢理生への執着を断ち切って諦めの境地にいたったところで雨天中止となったときなどは残酷だ。

それら特攻隊員たちの大半は、十代後半の少年たちだったことを忘れてはならない。

あの悲劇を風化させてはならないとおりに触れて語部をつとめてきているが、話のあとで聴いてくれた人たちから、

「生き残れてよかったですね」

そう慰められることがある。一般的にはそう思われるのだろうが、その場において先輩搭乗員たちの出撃を見送った者にとっては、

「死に損なった」

思いのほうがつよく、この七十年ずっとその思いを引き摺りつづけてきている。

戦争は悲惨だ。勝つても負けても不幸が付き纏う。国家間の紛争はなんとしてでも外交努力で解決してほしいとせつに希う。(了)

自由原稿

(女子学生の社会進出・少子化・高齢化)

「就活生をもつ親」のセミナー資料

(株)明治・創立者相馬半治翁留書

諸橋 奏

慶応三年(一八六七)十月十四日十五代将軍徳川慶喜は「大政奉還」を上表、徳川家康が慶長八年(一六〇三)幕府を江戸に開いて二百六十五年間続いた徳川幕府による政治制度は消滅した。十二月九日朝廷は「王政復古」を宣言する。

翌四年七月江戸を「東京」と改称、九月八日一世一代年号「明治」と改元した。「聖人南面而聴天下、嚮明而治」の意であるという。

明治二年(一八六九)三月京都から東京へ「遷都」、この年は「戊辰戦争終結」、「版籍(版図戸籍)奉還」明治維新真つ只中であつた。

(株)明治の創立者相馬半治翁は明治二年七月八日(一八六九年八月十五日)尾張国丹羽郡犬山町で生まれた。

相馬半治翁ご子息故相馬成朗氏提供の「田中家(相馬家)累代譜」によれば「田中家ハ

代々成瀬家(犬山城主)ニ仕へ犬山市出来町ニ住ミタリ 成瀬家ガ尾州藩ノ附家老タル關係上多クハ名古名城詰トナリ柳原中家敷(現二葉町)ニ住ミタリシモ廢藩後比米町、隅田町(現西区幅下)、下広井町(現中村区)等ニ転住セリ」とある。

続く「過去帳」(抜粋)は

初代 清林院春嶽光景居士 寛保三年(一七四三)三月二十二日没 物足父 名古屋市普光寺ニ葬ル

二代 心明院實參了性居士 宝暦十二年

(一七六二)九月八日没 田中物足ハ藩主

ノ信用厚ク公私ニツキ活動シタル人ノ如シ

普光寺ニ葬ル 弟某出家シテ大龍寺五百羅

漢ヲ作りタリトノ説アルモ詳ナラズ

昭和十四年十月同寺住職多々良大機師ノ調

書ニヨリ指月和尚ハ田中家出ニ確定ス

五代 孝徳院義庵道居士 明治三十二年

(一八九九)二月二十八日没 眞左エ門長

男菴ノ三男半治出テ盛岡藩相馬家(前下斗

米家)ヲ相続ス

と記す。

福寿山大龍寺について補足すると、名古屋の「五百羅漢の寺」として有名で、千種区史

跡散策路のポイントの一つの名刹である。黄檗宗で、三代藩主徳川綱誠つななりの命を受け享保十年(一七二五)喝伝和尚が建立、五百羅漢像は名古屋城築城時の犠牲者供養のために造られた。これらの由緒を語る小冊子『大龍寺略史―五百羅漢』は昭和十年相馬半治翁が来寺し「羅漢像造立の発願主で當山第四代の指月桂大和尚の生家田中家にゆかりがある」との申し出を佛縁として調査整理し発行(昭和十四年)したものと記されている。

翁の略歴についてはご自身の記述がある。

「明治二年、(尾張)犬山藩士田中菴三男として生まれた私は、維新草創の際家庭不如意のうち名古屋に育ち、明治十六年小学校教育を卒えず齡十五年にして小学校の助手となり、後、学力検定試験により小学校教師となり、十八年東京陸軍教団に入り下士官となった。ついで大将にでもならん希望を以て士官学校入学を願出しも、何故にや志願を拒否せられたため工業立身を決意、爾来独学自習に努め、兵役満期後において知人の好意により蔵前工業学校(東京高等工業学校)現東京工業大学)に入学した。併し、学修中更に日清戦役に応召軍務に服したため除隊後卒業、同校助教授

拝命、後南部藩士相馬家を相続、越えて三十三年文部省より糖業研究のため欧米留学を命ぜられ、帰朝後同校教授となり、台湾総督府技師兼教授に転じ、三十九年官を辞して……と。

翁の業績・略年譜

明治三十九年（一九〇六）十二月 明治製糖(株)創立（本社台南州曾文郡麻豆街麻豆四二九）専務取締役就任（大正四年社長 昭和十五年会長 十八年相談役）
 大正五年（一九一六）十二月 大正製菓(株)設立（十三年九月明治製菓(株)と商号変更）
 大正六年四月 房総煉乳(株)資本参加、昭和十年十二月極東煉乳(株)資本参加（十五年十二月明治乳業(株)設立）
 大正八年六月 北海道製糖(株)設立（昭和十九年九月北海道興農工業(株)と商号変更 二十二年九月日本甜菜製糖(株)と商号変更）
 大正九年十一月 株式会社明治商店創立（昭和十七年六月明治商事(株)と商号変更）
 昭和八年（一九三三） 明治護謨工業(有)設立（十二年六月昭和護謨(株)創立）
 昭和十年 神津牧場（神津邦太郎氏明治二十年日本初の洋式牧場開設）所有二十年八

月まで経営（群馬県甘楽郡下仁田町）

昭和十三年十月 山越鉄工場経営（二十三年三月明治機械(株)と改称）

昭和十六年 特殊製油(有)資本参加（二十一年九月明治油脂(株)と改称）

この他、外地では

製菓業―昭和十四年満州明治製菓(株)、十八年華北明治産業(株)・上海明治産業(株)設立

甜菜糖業―十一年樺太製糖(株)設立

乳業―十三年満州明治乳業(株)設立 他

特記事項

昭和十八年七月 財団法人相馬（犬山）郷

土育英会設立

昭和二十年五月 米軍の空襲により芝伊皿

子町（現港区三田）相馬本邸焼失

昭和二十一年一月七日 膝臓癌のため逝去

七十七才 一月十日明治製菓ビル講堂にて

社葬 横浜市鶴見区総持寺に葬らる。戒名

興明院大鑑照徹大居士

昭和二十年の敗戦以降、政治・経済・社会

は大混乱、激動のうちに昭和を駆け抜けて平

成と移り変わるが、この間、日本の企業は中

国の古典名言「創業は易く守成は難し」の七

十年であつた。相馬翁創業の明治各社もまた

栄枯盛衰例外ではなかった。

そして、平成二十一年（二〇〇九）明治の代表的企業である明治製菓(株)と明治乳業(株)は経営統合し、明治ホールディングス(株)として新出資、更に二十三年四月食品事業会社「明治」と薬品事業会社「MeijiSeika ファルマ(株)」に再編成され経営統合効果を目指している。たまたま、菓子・乳製品の生産を統合した新工場は尾張（愛知県稲沢市）に建設の運びという。「明治」と「尾張」の奇しき絆は相馬翁の縁であろうか。

ところで、平成二十三年・二十四年の就活人気企業を昨今注目の理系女子でみるとトッポは明治グループである。不況に強い食品大手のイメージからの選択と評価されている。「食」を「腹」で選んだ戦後の二十世紀後半から、「口(舌)」で選んでいる現代であるが、「命は食にあり(中国古典『管子』)」の生命科学の中心に「食」が近未来の夢としてクロージアアップされる前触れと感ずるのは僻目であろうか。

自由原稿

再評価される盧泰愚元大統領

新井 宏

もう十年以上も前になるが、韓国の学生達に盧泰愚のことを聞くと、ほとんど例外なく、最低の大統領だったという。

「いや、そんなことはないでしょう。軍事政権から流血なく文民政府に移行させたのは、盧泰愚大統領じゃないのですか。彼がいなかったら、今の韓国は、まだまだもたもたしていたはずですよ」と言うと、変なことを言うヤツだとの顔をする。

実は、それほどまで不人気であった盧泰愚大統領がこのところ韓国で再評価されている。今の韓国は、盧武鉉の行き過ぎた「民主化」の後遺症で、保守政権の朴槿恵大統領さえも、「慰安婦問題」と「竹島問題」で「反日」を唱えないと、国民の支持が得られない。

しかし、本音の部分では、もっと現実的な対処を模索していた。野田内閣の時には「面子をたてる」という線でいったん折り合いが付いていたのに、安倍内閣がそれを反故にし、靖国参拝まで強行したので、振り上げた拳を下ろせない面が大きいのである。

そんな中で、やっと韓国でも、盧泰愚元大

統領を現実的に、肯定的に評価する論調が現れていることに注目している。それは「最低の大統領」を再評価する姿勢が、日韓関係を現実的に処理することに通じるからである。

例えば、四月二日付の「中央日報」の論説は、朴槿恵の「ドレスデン宣言」、すなわち、中国を意識して米国一辺倒を廃し、和解・交流・協力から南北統一に向かう構想に、冷やかではあるが「我々は統一をきちんと準備しているのだろうか」と自問し、続けて「南北関係改善の突破口を開いた盧泰愚の転換期的なリーダーシップに解答がある」と、次のように盧泰愚を持ち上げているのである。

まず、盧泰愚は、国会を野党に握られた悪条件下にもかかわらず、南北不可侵を強調した南北基本合意書、非核化共同宣言、南北国連同時加盟などを韓国の主導で引き出し、共産国家の中国・ソ連と修交し、米国から平時作戦統制権の返還を受けたことなど外交面で大きな成果を挙げている。

更には、軍出身にもかかわらず「すべての外交は内政の成功に基づく」という信念を持ち、ソウルオリンピックを成功させ、最低賃金制導入、医療保険拡大、国民年金拡大など社会統合的な福祉・労働政策の基礎を確立した。

あるソウル大教授は『盧泰愚時代の再認識』という本を出し、又、ある高麗大教授は「盧泰愚を、かつらをかぶった全斗煥と呼んだのは速断だった」と反省している。

だから、威張って言うならば、私の見解は韓国よりも十年ほど進んでいたことになる。その証拠と言うわけでもないが、三年前の『まんじ』二二二号に、結構な長文を載せている。ちよつと抜き書きして紹介しよう。

そもそも、私が盧泰愚に注目したのは一九九〇年に来日した時の演説にある。彼は日本人でも知る人の少ない雨森芳州の「善隣外交」を引いて日韓友好を訴えたのである。この盧泰愚の演説によって、雨森芳州の日本での再評価が進んだ。

さて、韓国に朴正熙の軍事政権が誕生したのは一九六一年である。その頃、韓国の一人当たりの国民所得は年六十ドルに過ぎず、北朝鮮の経済力の方が圧倒的に強く、南北学生会談に向けてソウルを出発した学生らのデモは十万人に達し、赤化される危機にあった。しかし時の張勉内閣にはこの動きを抑える力が無く、朴正熙のクーデターは必然的なことであった。

朴正熙大統領は軍事政権でありながら、「漢江の奇跡」を成功させ、続く全斗煥も、物価

安定、国際収支の大幅黒字、高度経済成長という三兎を一度に捕まえた。この二人の大統領は政治面では凄まじい批判や非難の対象になったが、確固たる統治哲学をもち一貫性のある経済政策を進めたと評価されている。

それに対して、その後を継いだ盧泰愚はビジョンも哲学もなく経済が大きな打撃を受けたと批判されている。果たしてそうなのか。ちなみに盧泰愚の五年間の経済発展は年率十四％であり、驚異的な水準であった。次の金泳三が国家破産に瀕し、国際通貨基金の管理状態に陥ったことと比較すれば明白であろう。しかも、盧泰愚は軍事政権から文民政府へ流血なく移行させたばかりでなく、開発独裁の強権経済から自由経済に軟着陸させるのに成功したのである。

私が盧泰愚を評価するのは、不利を承知で、全斗煥を裏切ってまで直接選挙制を受け入れたことにある。一見、盧泰愚は温和な性格のため優柔不断と見なされやすいが、信念を暖めていて立つべき時には立つ人物であった。

特に評価したいのは、対北朝鮮問題への深い洞察力である。在任中の一九八九年にはベルリンの壁が崩壊し、翌年には東西ドイツの再統一が実現する。朝鮮半島の統一は韓国の悲願ではあるが、現実問題として、体制の異

なる貧しい北朝鮮を統合することなど、韓国に耐えられるはずがない。とにかく国内問題としてではなく、国際問題としてこれに対応するしかない。それが盧泰愚の判断であり、それを具体化したのが、北方政策における「遠交近攻」であった。

ソ連には三十億ドルの経済援助を与え、国交を回復、北朝鮮への安価な石油供給や戦闘機や武器の供給を中断させ、北朝鮮に多大な打撃を加え、しかも、韓国・北朝鮮の同時国連加入という大成果をもたらした。

以上、韓国のマスコミに先駆けて、盧泰愚の再評価をしたとの自慢話である。

四月講演要旨

キリシタン大名 高山右近：殉教まで

鍋屋次郎

秀吉の九州平定直後、博多筥崎宮陣営で、突如として秀吉はバテレン（宣教師神父等）の国外追放と高山右近に対するキリシタン棄教命令を出した。

少し前には大阪城でバテレン達に布教許可

を与えていた秀吉が、何故突然豹変したのか。

それに対して、秀吉に対して少しも臆することなく、領地も、俸禄も、地位も、家臣も、すべてを放棄してキリシタン信仰を選択（守り続けた）した高山右近。そして放浪の後、加賀前田家の客将として、二十六年を加賀でキリシタン信仰を守り続け、利休七哲の一人として茶道（侘び茶）と共に生きてきた。

慶長十八年（一六一三）十二月二十三日、徳川幕府からキリシタン禁教令が出され、右近一家は長崎に送られ、国外追放となり、一六一四年十二月二十一日マニラに到着した。

当時スペインの植民地であったマニラでは総督、イエズス会会員など多くの人が出迎え、儀仗兵は並んで礼砲を撃ち、信仰の勝利者として、恰も日本の国王のような出迎えを受けた。

しかし、到着後高熱をだし、マニラ到着後四十日程度の翌年二月三日、六十三歳の地上の生涯を終えた。

日本のキリシタン史の中での特異な存在である高山右近の生涯での大きな出来事と、右近のそれへの対応を振り返ることによって、右近の実像に迫って行くことができるとおもっています。

畏友中山喬央大兄の急逝を哀悼す

鯨 游海

其一

金印謎深端緒無 金印の謎深くして端緒なく

霧中邪馬臺王都 霧中なり邪馬台の王都は

雖今欲恃君知見 今君の知見を恃んと欲と雖も

何急忽忽逝置吾 何ぞ急なる忽々と吾を置いて逝くとは

(注)金印||国宝の「漢委奴國王」の印。偽造説が絶えない。

其二

茫漠相知五十年 茫漠たるかなあひ知りて五十年

君探薪炭我斟泉 君は薪炭を探り我は泉を斟む

俱論同哭舉杯笑 俱に論じ同に哭き杯を挙て笑へば

人曰公眞兄弟焉 人曰く「公ら眞の兄弟なる焉」と

(注)承句||広瀬淡窓「君汲川流我拾薪」より。勉励するさま。

〈お知らせ〉

- (1) 講師が変更となります。
5月 (当初)森下征二→高橋正彦 (森下氏病氣欠席の為)
10月 (当初)中山喬央→諸橋奏
- (2) 自由執筆担当が変更となります。
6月 [原稿提出5月末] (当初)中山喬央→高橋正彦
1月 [原稿提出12月末] (当初)中山喬央→高橋正彦
- (3) 11月討論会の議題募集中です。
- (4) 12月忘年会を12月10日(水)夜、学士会館にて例年通り実施します。